

# 教職大学院

# Newsletter No. 10

福井大学大学院 教育学研究科 教職開発専攻

09.02.27

## Time to Change

福井市至民中学校校長 山下忠五郎

元旦の福井新聞で県内企業トップのインタビュー記事を読んだ。多くのトップが、「企業も変わらなければ生き残れない」と口をそろえていた。

学校改革という大きな流れの中にある学校の今を言い当てていると思いながら読んだ。学校も、21世紀の知識基盤社会を生きていく子どもたちに求められる学力を培い、資質を養うためには変わらなければならない時なのである。この時にあたり、福井大学教職大学院の拠点校としてのこれまでの取組を振り返ってみる。

至民中学校では、教育基本法や学校教育法などの法改正、学習指導要領の改訂、加えて異学年型教科センター方式による移転開校という絶好のチャンスを得た。この機を生かして授業改善を中核に据えた学校改革に挑戦したのである。「当たり前をやってきたことを根幹から見直す」「既成の価値観にとらわれない」「前例踏襲からの脱却」を念頭におきながら「大胆に変えていくんだ」という強い意志を持って改革に取り組んできた。常に「授業改善」という学校改革の原点に立ち返りながら…。

前述の記事には「地域に信頼されてこそその企業」というコメントがあったが、学校もまた「地域に信頼されてこそその学校」である。信頼度の高まりに比例して地域の方々の理解が深まり、協力が得られ、支えてもらえるのである。信頼の一つ目は学力や資質をしっかりと身につけさせることである。二つ目には、生徒・教師・学校の活動を地域の方々に見えるようにすることである。一つ目は学校の最も重要かつ当然の務めである。二つ目はこれからの学校が「地域の信頼」を得るうえで大きな要素である。そして、

地域の方々に「学校はなんていいことをしてるんや…ほんなら一肌脱ぐか…」と言わせるまでになったらこっちのものである。「至民中学校ボランティアガイド」「至民アカデミー倶楽部」は一肌脱いでもらった一例である。学校のサポーターが誕生したのである。こういった広がり新たな改革の火種として大切にしていかなければならないと考えている。

福井大学教授の松木先生は、改革の継続には「教師の成長」と「教師の学びを支える仕組み」が不可欠であると言っている。至民中学校では、「白紙から」「日常的な実践研究」「実践から理論を構築」を基本方針とした協働研究体制を構築し、教師の力量形成にも努めてきた。

以上のように、至民中学校はこれからの中学校教育の在り様を体現する実践と仕組みを有している。この財産をフルに活用し、今後も改革を継続し、その実践を発信し続けることが至民中学校の使命であり、教職大学院拠点校としての役割だと考えている。

これからの変化の激しい時代を生き抜く子どもたちのために、中学校教育の未来を切り開いていく歩みを止めるわけにはいかないのである。

### 内容

- Time to Change (1)
- 長期実践報告会を終えて (2)
- 連携校だより (3)
- 本郷小学校参観報告 (6)
- スタッフ紹介 (8)
- 教育実践と教育改革を考えるために (11)

# 長期実践報告会を終えて

教職大学院では、修士論文に替わるものとして、長期実践報告の作成および発表が課されています。スクールリーダー養成コースの院生は、全員が1年履修であったため、2月14日（土）に、長期実践報告会を行いました。これに先立ち、リーダー院生の皆さんは、通常の勤務の傍ら報告書の作成に取り組みました。何度も大学に足を運んだり、書き直したりしましたが、振り返り、記述することで達成感を味わったことと思います。報告会は、少人数のグループで行われ、一人につき1時間20分ほどかけじっくりと語り合い、聞き合いました。



## 長期実践報告会を終えて

岸野 麻衣（福井大学教職大学院 講師）

2月14日、教職開発専攻と学校教育専攻（教育学系）合同で長期実践報告会が行われました。小グループに分かれ、今年度修了するスクールリーダー養成コースの院生や学校教育専攻の修士2年生から報告がなされ、教職専門性開発コースの院生や来年度入学予定の現職教員と共に語りあいました。

私の参加したグループでは2つの報告がなされました。1つは、学校での地域連携に関する5年間にわたるプロセスについてです。前任校での総合的な学習を中心とした地域連携の振り返りから始まり、現任校で地域連携に関する研究に取り組んでいった過程での変化が丁寧に語られました。「なぜ地域と関わる必要があるのか？」という問いを抱えながら、教師間で共にその価値を探りつつ、まずは学校を地域に開き、地域の人々が日常的に自主的に関われるよう仕組み、生徒が社会とのつながりを感じ、文化を身近なものとして触れることができるよう、様々な活動がなされてきたことがよくわかりました。

もう1つの報告は、コーディネータ・コミュニティのデザインについてです。いくつかの実践記録や理論書の検討により、「コーディネータ」に求められる力量とは何なのか、どのようにしたら力量が身につくのかということが語られました。教師もまた、子どもたちの学びや同僚との協働をコーディネートする力が求められていると思います。その力量とは単なるスキルではなく、自ら思考し判断し協働し実行していく力であり、それには実践記録を書いて実

践を省察し、他者と共有し、外部の視点を得ながら展望していく場が重要であるとのことでした。

2つの報告を通して、教職大学院での「学び」について考えさせられました。おそらく日々の実践に追われていると、「なぜなのか？」などと実践の意味を掘り下げて考えたり、5年といった長期的な目で実践を見直したりすることはなかなかできないのではないかと思います。しかし、子どもの学びを深め、教師が協働していくには、自分の思いを問い直すことや、実践の意味を同僚と共有していくことが必要になります。教職大学院では、それを学校での具体的な活動に携わりながらサポートし、その「場=コミュニティ」を保障していくことが求められているのだと改めて感じました。この学びのコミュニティが若い世代や第2期生にどう広がっていくのか、楽しみです。



# 連携校だより

## あわら市金津中学校教諭 水持直幸・荒川誠



「多くの若い先生たちは、授業づくりで悩んでいるみたいよ。」

「教科が違ったり年齢差があったりすると、教師同士でも話しづらい。」

今年度は、金津中学校の先生方が何を思っていたり、何に悩んでいるのかに耳を傾けるように心掛けてきた。その時に聞こえてきた言葉である。

教科・学年・年齢の枠を越えて学び合うコミュニケーションの場の必要性を感じたので、いろいろと思索した結果、二つのアクションを提案し、実践を試みた。

その一つが有志による「授業改革ワークショップ」という勉強会である。

毎回、約 10 名程度の参加者を得て、生徒が主体的に取り組む授業づくりのための課題を討論したり、実際の授業の様子を撮影したビデオを見たりしながら、生徒の活動について研究する時間を持った。年末に教育研究所が募集した「平成 21 年度初等中等教育奨励事業」に応募するなど、今後も継続・発展させていく予定である。

二つ目は、全職員が参加する「生徒指導コミュニケーション」というカンファレンスの開催である。教科・学年・年齢をミックスさせた 4～5 名の小グループの形態をとり、一つの事例について自由討議を行った。元々、生徒指導の課題について共通理解を図るために始めた取組であったが、「授業づくりや評価なども話し合いたい」とか「教育相談の事例研究もしたい」など、意欲的な感想も聞かれた。今後は、金津中学校の新しい現職教育として定着していくと手ごたえを感じている。このように、徐々にではあるが、教職大学院にて学んだ「実践コミュニティ」が、金津中学校にも芽を出し始めている。



今までは、自分のことで精一杯だったが、大学院で学ぶことにより、外に視点を移して金津中学校を見ることができるようになってきたと感じている。この 1 年は、私の教師生活の大きな節目となった。(荒川 誠)



金津中学校は、金津高等学校との「中高一貫教育」や、金津地区 5 小学校との「小中連携事業」などを通して、金津中学校を核とする独自の教育環境を作っている。

あわら地域中高一貫教育では、金津中学校・芦原中学校と金津高等学校が 6 年間で接続し、ゆとりの中で個性や創造性を伸ばすことや連携校の先生と生徒間の交流を深める中で生徒の進路意識を高

め、進路実現を図っていくことを目的としている。

金津中学校では、2 年次で中高一貫連携クラス選考を行い、3 年次に 1 クラスの連携クラスを編制し、選択授業の中で、中学校の発展的な内容と高等学校の内容につながる授業を高等学校教員と中学校教員との T T で授業を行っている。



今年度、初めて金津高等学校に編制された中高一貫クラス 1 期生から具体的に話を聞くことで、中学生の進路意識を高めたり、福井県内 3 地域で行われている中高一貫関係校の中学生や高等学校生が一堂に会して、夢や学校生活や学習について語り合う「中高一貫フォーム」に参加し、進路意識を高めたりしている。また、授業公開や教員相互の交流とともに授業の話し合いも行われてきている。

今後も、中高一貫教育や小中連携事業などを通して、地域の教育機関との連携を深め、小学校から高等学校・さらに大学を見据えた教育が展開できるように、そして、協働で新しいものを創り出していける組織「コミュニティ」づくりに努力していきたい。(水持 直幸)



県内に4校ある教職大学院の連携校。ここでは、越前市の中学校に勤務する2名のスクールリーダーの奮闘を紹介し、教職大学院での学びを土台として、校内外へ研究を広めていく姿を伝えていきたい。(上野澄子)

## 越前市武生第一中学校 川崎 正人教諭



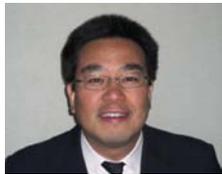
1月19日午後、越前市武生第一中学校の第3理科室には、むせ返るような熱気が立ち込めていた。この日行われた、川崎教諭の理科の授業研究会場である。研究部が中心となり、生徒の「学び合い」をテーマに、授業研究を進めてきた。

研究協議は参観したグループごとに話し合わせ、どの教員も生徒の学び合う姿を熱心に語った。川崎教諭のねらいの一つに、新しい研究協議のスタイルの提案があった。生徒たちが実験をもとに互いの考えを述べ、どんな化学変化が起こったのか追究していく姿について、意見交換が行われたのである。

川崎教諭の生徒を見守る目は温かく、軟らかい空気の中で授業が進められた。授業研究グループ「Mの会」を立ち上げ、その発起人としての使命を果たす授業であったが、この研究スタイルも、学校の中へゆっくりと、しかし着実に伝わっていくもの考える。

「この基石、なんであるんやろ？」実験器具の中に基石を見付けた生徒たちのつぶやきが、化学変化について考えるモデルであると気付いた瞬間、「あ〜、そういうことやったんか」というため息混じりの声に変わった。参観した教員も、実は同じ思いだったのではないだろうか。

燃焼後に消滅した木炭。フラスコ内に残る酸素と二酸化炭素。実際に目にしたのは何だったのか。生徒たちは持てる知識をフル出動させて考えた。教科書や参考書では決して得られない「学び合い」がこの教室にあふれていた。川崎教諭のチャレンジは、今後も静かに続いていく。



川崎 教諭

2年の総合的な学習では、今年度初めて「赤ちゃんだっこ体験」に取り組んだ。命のぬくもりと重さを実感するとともに、母親との会話から、家族の愛情の深さに気付かせ感謝の気持ちを持たせることが目的である。生徒には「赤ちゃん＝過去の自分」との出会いであると同時に、「親＝未来の自分」との出会いとも言える。

「赤ちゃんだっこ体験」には、生徒、赤ちゃんとその親、そして生徒の保護者もスタッフとして参加した。生徒だけが主役ではなく、参加した全員が何かを得ることができ、お互いに学び合う場となった。

このプロジェクトは、理科や技術・家庭科、道徳、学級活動とのコラボレーション、保健主事や養護教諭との連携、助産師、保健師、PTA や市健康増進課の支援があつてこそ実現できた。公民館を通じて呼び掛けたことで、コミュニティが大きく広がり、地域に開かれた学校づくりの一環としても意義があつた。

## 越前市武生第二中学校 吉村 信彦教諭

越前市武生第二中学校は、越前市の南部に位置する。学校からほど近いところには田園地帯が広がり、緑豊かな環境の中、生徒たちが近くの農家の協力を得て栽培している黒米（古代米）は、総合的な学習の中核にある。今年度、「大豊作への道」という一大プロジェクトが立ち上げられた。

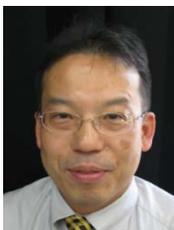
田の整地から種もみまき、田植え、施肥、除草、刈り取りまでを生徒が行うだけでなく、収穫した黒米をイベント会場で生徒自身が販売した。

この活動を通して、生徒たちには大きな成長が見られたという。田んぼのぬめりに足を滑らせていた生徒が、積極的に追肥や稲刈、古代食づくりに取り組んだり、定点観察する生徒が稲の葉の変色を心配したり、イベント会場で「どんな味なの。」と聞かれた生徒が、進んでおにぎりづくりをしたりと、教科では見られない一面がうかがえたことも、また大きな収穫だったのではないだろうか。同時に、全校を挙げてのこの取組は、学校全体のコミュニティを成熟させ、また、管理職を中心として、地域とのつながりを確かなものにしていくことが実感できたという。



「赤ちゃんだっこ体験」は、武生第二中学校で長年取り組まれてきた。武生第一中学校の川崎教諭は、これを参考に今年度初めて取り入れた。両教諭は元同僚で、年齢も近い。今年度、教職大学院に入学してからは、密度の濃い情報交換をしてきた。大学教員の学校訪問の際には、両校のどちらかで研究会を開き、それぞれの学校の教員も出席して協議を重ねながら、双方の研究にもじっくり耳を傾けきた。

前出の武生第一中学校の授業研究会にも、吉村教諭をはじめ教職大学院生が複数訪れ、エールを送った。このように、越前市から協働研究の輪が広がりつつある。スクールリーダーの更なる活躍に期待したい。



吉村 教諭

私が勤務する武生第二中学校は多くの特色ある活動を展開している。社会性の育成や職業教育を目的とした、命のぬくもり体験や黒米栽培、職場体験、文化・芸術体験、福祉体験などである。これらの体験学習では、地域社会とのかかわりや保護者との連携など人々とのかかわりを増やしながらか学習活動を行い、その過程で福井型コミュニティの形成や教師の同僚性の向上を図ってきた。私自身、この一年は黒米栽培学習を通し、同僚性の大切さ、協働で取り組むことの大切さを実感し、その向上に努めてきたつもりである。まだまだ学びの途中であるが、今回、「協働を生かした学習環境づくり—子どもの豊かな人間性や社会性を育む体験活動の充実—」の研究テーマで活動を振り返るに当たり、教職大学院の先生方を含め多くの先生方からの御意見をいただき、感謝しているところである。

# 本郷小学校参観報告

毎週、木曜日は、インターンカンファレンスを行っていますが、ときどき、県内の学校を訪問し、授業参観などを行ってきました。今回は、へき地複式の学校である本郷小学校を参観しました。

## 本郷小学校を訪問させていただいて

長田 陽佑（教職専門性開発コース／福井大学教育地域科学部附属小学校インターン）

初めて複式学級を参観させていただいた。私が抱いていた複式学級のイメージは、2つの学年が、同時に同じ内容の授業をする形、つまり普通の学校と余り変わらないものだと思っていた。

しかし、次のような授業の様子に私は驚いた。

教室の前後に黒板が1つずつあり、子どもたちは学年ごとに背中を向け合って授業を受ける。先生は、1時間の授業中に2学年分の授業を別々に行うため、前や後へ移動する。先生が一方の学年の授業に行っている間、他方の学年は、子どもたちだけで、ワークシート学習や意見交換など、自主学习を静かに進める。

この中でも、特に驚いたことは、子どもたちが、自ら意欲的に自主学习をする姿である。先生が見ていない時間でも、進んでワークシート学習を行ったり、子どもたちだけで発表し合ったりしていた。子どもたちには、自主性や協働性が身に付いていた。正直、私は「この子たちはすごい」

と驚くばかりだった。

訪問の最後に、先生方に質問する機会をいただいた。私は「本郷小学校や複式学級での喜びは何ですか？」とお伺いすると、先生は「すべてが喜びですね。校務分掌が大変ですし、授業も難しいのですが、児童数が少ないこともあって、子どもと、そして保護者の方とも、一人一人の触れ合いが密なので、私のやりがい、生きがいになっていますね。」と笑顔で答えてくださった。私自身も、1日という短い間であったが、子どもたちと心温まる楽しいかわりができたし、ある1年生の児童からは、「先生、これあげるね。」と、私に動物の絵をプレゼントしてくれる出来事もあった。この思い出は、私の宝物である。

この心温まる子どもたちとのかかわりと、すばらしい先生方の使命感に触れ、私の教師へ夢はますます膨らんでいく。



## 小さなころから

鈴木 章史（教職専門性開発コース／福井大学教育地域科学部附属小学校インターン）

確か 11 月ごろだったと思います。淵本先生から本郷小学校の見学を勧められたのは。私は附属幼稚園でのインターンシップを行っており、せっかくなので公立幼稚園も見てみたいと思っていました。そこで、今回幼稚園と小学校が併設されている本郷幼稚園・小学校を参観させていただくことになりました。まず驚いたのは、きれいな校舎・園舎が一つにつながっていることです。休み時間になると上から小学生が降りてきて、校庭へと飛び出していく。幼児はそんな姿を幼稚園のころから見ながら、小学校に入学していく。幼稚園と小学校のつながりを考えると、校舎がつながっているだけでもメリットは計り知れないと思いました。また、給食も園児と児童と一緒に食べることができ

るランチルーム。ここでは、調理員さんも一緒に給食を食べていて、子どもたちも好き嫌いなく、みんなもりもり食べていました。常に残菜ゼロということが更に驚きでした。

本郷小学校の上田校長先生は、実は、私が小学校 1 年の時の担任でした。あれから 16 年経った今、こうしてお会いすることができ、とてもうれしく思いました。また、川崎先生には高学年の時にお世話になりました。あの時は毎日先生のご指導を頂いていたのが、今こうして教員を目指す者として、何かの巡り合わせとして再び上田先生にお会いできたのは何かの縁だと思います。初心に戻って日々精進して、行く行くは先生方のような立派な教師になりたいと思います。ありがとうございました。

## 本郷小学校の参観を振り返って

黒川 清貴（教職専門性開発コース／福井市立至民中学校インターン）

2 月 5 日、複式の授業参観を目的に、本郷小学校へ行きました。山間部を進む車の車内から最初に見えたのは、大変きれいな校舎と山の斜面に作られた 3 つの広場でした。想像以上にきれいで新しい校舎と広々とした空間に驚きました。校舎に入ると、子どもたちが元気いっぱいあいさつで迎えてくれました。休み時間に廊下を歩いていると、子どもたちが近寄ってきて、「見て、見て。」と縄跳びの演技を見せに来てくれました。本郷小学校の子どもたちは、初めて会う私たちに壁を作ることなく、すぐに自然と受け入れてくれました。本当に純粋で素直な子どもたちだと感じました。

複式の授業は、2 時間、国語の授業を参観しました。授業中、先生は直接指導（教師が直接指導する時間）と間接指導（一方で教師が直接指導しているため、児童同士で活動する時間）、間々指導（どちらの学年にも直接指導しない時間）の 3 つを繰り返しながら、授業を展開してしまし

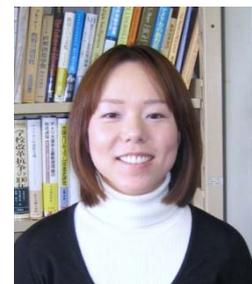
た。1 時間内に、両学年を往復するため、それぞれの教材研究をしっかりとしていなければ、授業を構成することは難しく、授業が成立しないことを深く実感しました。また、直接指導する学年を移動する際は、一瞬で頭を切り替えて指導しなければならないことや、直接指導しながらもう一方の授業展開を考えていなければならないという、非常に大変で難しい授業だと感じました。

教師同士の同僚性の良さも実感しました。職員が少ないということも理由の一つにあると思います。しかし、それ以上に、お互いを助け合い、励まし合いながら、本郷小学校をこんな学校にしたいという職員全員の意思が、同僚性をはぐくんでいるように感じました。

参観を通して、小規模校ならではの多くの学校の良さを実感することができました。本郷小学校のような、子どもも教師も生き生きと生活している学校で将来働きたいと思いました。

# Staff 紹介⑨

八田 幸恵 はった さちえ



## はじめに

教育地域科学部教育実践科学コースの八田です。2008年4月に着任し、もうすぐ1年が経ちます。

さて、学校のカリキュラムや授業を対象とした教育方法を専門にしてきた私にとって、研究者として自己紹介をするということはとても難しいことです。何をアピールすればいいのかかわからないからです。NHKの「ようこそ先輩」という番組にもしも私が呼ばれたとしたら、プロの芸術家やスポーツ選手や他の研究者のように、子どもたちが目を輝かせる何かがあるだろうか…と途方に暮れる（杞憂ですが）ときの感覚によく似ています。

というわけで(?)、研究の中身そのものよりも、私の研究上の問いが形成された過程について書こうと思います。

## 「学校教育の研究」との出会い

私が学んだ教育学部は少し変わったところで、フロイト心理学から近世の人づくり研究まで、幅広い領域の教育学研究者が多数集まっていました。ただ、学校教育に関心を持ち、講義で学校の授業やカリキュラムを扱う先生はほんの少数でした（教科教育学はゼロでした）。教育学というのは心理学や哲学や社会学の集まりなのだと思っていたほどです。それもとても面白かったのですが、私もこんなことがしたいと思えるものには出会いませんでした。

しかし学部3年生のときに受けた教育方法学の講義で、教育学のイメージが変わりました。「教育方法学は困っている教師と困っている子どものためにある」という言葉から始まり、生活綴方や水道方式また斎藤喜博や大西忠治など時代の画期となった理論と実践について、そして学力とは何かという問いをめぐる議論について話してくださいました。何十年前の理論や実践もありましたが、今でもまったく色褪せないものばかりだと感じながら、毎回わくわくして講義を聴きました。自分でも不思議なのですが、私にとっては他のどの領域の研究よりも「学校教育の研究」こそが、「大学に来た！世界が広がった！」と思わせてくれるものでした。

## 授業づくり、授業研究の世界へ

大学院に進学すると同時に、私が所属する研究室とある小学校が共同で授業研究をすることが決まり、私も国語で参加させてもらうことになりました。「授業を見ることができるなんてラッキー」くらいの軽い気持ちで出向いて行ったのが甘かったのです。まず教室に受け入れてくれるまでに半年かかりました。なんとか授業観察ができるようになったものの、指導案が読めない、授業が見えない、先生たちの言葉がわからない、教材について質問されても答えられないという自分の状態に啞然としました。

とにかく「勉強」しなければ焦ったものの、教材解釈、国語科教育論、授業研究の理論、子どもの言語発達の理論など多くの領域について知らなければならぬことに気付きました。しかし、常に次の授業が迫ってきますので、まずはじめに何を知るべきか？この次はこれでいいのか？いやその前にこれを読むべきか？など切羽つまりながら、結局は手あたり次第に読んでいきました。また同時並行して先生たちが授業から多くのことを学んでいる場面にたくさん出会い、自分でも経験することもあり、経験に学ぶことの大切さも知りました。このあたり（修士1～2年生）から、「特に若い教師が授業やカリキュラムをつくるためにはどのような力量が必要なのか？それはどのように獲得・形成されるのか？」という問いを持つようになりました。

しかし、博士課程に進学して無我夢中の状態から抜け出すと、自分は教師と同じようになることを目指しているのだろうか？研究者が授業づくりや授業研究に参加することに何の意味があるのか？教師の成長を支援するとはどういうことなのか？といった、なんだかとても原初的な疑問に悩むこととなります。「何を今さら」という悩みなのだと思いますが、今でもわからないままです。

## 福井大学に来て

福井大学に来て、教職大学院に関わらせてもらうようになって、もう一度はじめから学び直しているような感じが

します。使われる言葉も、授業研究の仕方や教師の学習の組織の仕方も、すべてが今までと違います。今のところ私にできることは、学力評価論の知見で授業改革実践を意味

づけていくことと、国語を中心とした授業に何らかの形で関わることです。少しずつ成長しながらできる限り貢献していきたいと思っていますので、よろしくお願いします。

## 佐分利 豊 さぶり ゆたか

当教職大学院の協力教員としてお手伝いをさせていただいております佐分利 豊です。専門は数学です。スタッフ紹介とのことで、当教職大学院とのおつきあいをすることになった僕なりのいきさつを書かせていただきます。

世間では、数学が嫌いであるとか、苦手であるという人たちが多数派を占めているということに気づくことができたのは、中学2年生の時でした。それは、まわりの級友たちの大半が1次方程式の解法を習得できずにいたのを、解けるようにとのサポートを行った時のことでした。しかし、その後、数学を生業として延々数10年生きてきたのですが、この問題が克服できる、あるいは克服しなければという思いをいだき始めたのは、近年になってからのことでした。

そもそも数学教育に関心をいだき始めたのは、9年ほど前のことでした。非工業化地域での数学教育はどうなっているのだろうか、というのが最初の関心でした。当時、インターネットが普及し始めていたことと、知人から NGO の海外での教育活動に関する情報を得ることができたことなどにより、エスノ数学 (ethnomathematics) というものに出会うことができました。これは、'80年代に開始された非工業化地域や工業化地域における黒人などのマイノリティー・グループの数学文化の見直しと、それらの人々の間での数学教育の改革をめざした運動の基礎概念となっているものです。その運動を担っている人々の中心的な考えは「数学という学問の対象は普遍であるが、それを学ぶ過程は学び手の文化、すなわち生活や思考の様式に依存し多様なものである。従って、数学教育も学び手の文化に見あった形での組立てが求められる」というものです。この考えは至極当然なものなのですが、僕の中で「数学が嫌いであるとか、苦手であるという人たちが多数派を占める現状を克服できるのではないか」との思いが芽ばえたのは、この考えの明確な表明に出会ってからのことでした。つまり、数学学習のゴールが決まっているのであれば、今日の無駄のない抽象的で洗練された形での数学理解を学

び手にそのまま提示することが最も合理的かつ効率的であるとする僕自身の考えの見直しをうながされたのでした。さらに、学び手それぞれにとっての理解の筋道があるのであれば、それに沿うことで、数学が苦手という人を減らすことができるのではないかと考えたのでした。実際、エスノ数学の理論家、ブラジルのダンブロージオは、数学教育の役割は、学び手がその文化的環境の下で手にした数学的知識 (エスノ数学) と、人々にとって非日常的で、かつ抽象的で洗練された学校数学の思考の様式との間の橋渡しをすることであるとの主張を行っています。

こうして、僕なりにめざすべき数学教育の改革の方向が見定まったものの、そのような数学教育をどのようにして作りあげたらよいか、まったく見当がついてはいませんでした。しかし、幸いなことに、このような関心に理解を示してくれた (当時) 國學院大学の里見 実さんが、アメリカの高等学校で実施されている、問題解決型の数学学習のプログラムである IMP (Interactive Mathematics Program、数学相互学習プログラム) の存在を知らせてくれました。これは、現実世界や学び手の知的好奇心を刺激するような問題を提示し、その解決をめざす過程で、実験などの数学的活動の体験を通して学び手自身に数学的概念や手法を開発させることをねらった協働学習のプログラムです。実際、IMPの教科書を手にしてみると、そこには学び手にとって何とも自然で豊かな探究の課題が散りばめられていたのです。IMPの開発の哲学は、オランダの数学者、フロイデンタールが唱えた現実的数学教育 (realistic mathematics education) であるとのことですが、僕自身は、エスノ数学の考えに学び手の自立・協働という要素を加えたすばらしいプログラムであるとの理解をしています。ちなみに、ダンブロージオさんからの私信でも、今現在、彼が思い描いている数学教育の改革の方向もまったく同様であるとのことでした。



さて、思い描く数学教育の改革の方向がより一段高く、かつ鮮明になってきた時分、2006年の春に、幸いにも福井大学教育地域科学部に移ることができました。とはいえ、福井に来る前に、こちらの事情を知っていたということではありませんでした。こちらに来て、附属小・中学校での公開授業を見学させていたところ、何と、求める方向での授業改革の実践を目の当たりにすることができたということでした。こうして、教員生活の最終版で、求める教育改革が進行している現場を拝見できるところにやっ

て来たのですが、それに加えて、その改革をさらに広げることを目的とした当教職大学院が、翌、2007年に開設されるという、さらなる偶然が加わりました。こうして、当教職大学院とのおつきあいが始まったのですが、教育実践の部分では、皆さんから学ばさせていただくことばかりです。ですので、よろしくお願いいたします。幸いに存じます。

最後に、上記のIMPの1年生の教科書の翻訳を教職大学院の会議室に置かせていただきましたので、関心がおありの方はご覧ください。

## 中村 保和 なかむら やすかず

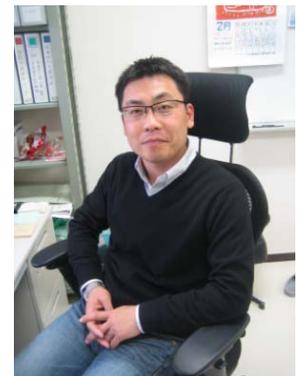
2007年10月に福井大学教育地域科学部に障害児教育コースの教員として着任し、あっという間に1年半が過ぎようとしています。重複障害教育を専門とする私にとって、福井は、とてもよい実践をしている養護学校や施設がある魅力的な地です。福井大学が私にとって初めての職場となることに大きな期待と喜びを感じています。

福井大学に来る前は、大学院博士課程後期で大学院生をしていました。大学院では、重度重複障害と言われる子どもたちへの教育的対応に関する実践研究を行っていました。対象となる子どもは、重複障害と言われる子どもの中でも、とりわけ視覚聴覚二重障害(以下、『盲ろう』と記す)の子どもで、こうした子どもたちの生活の場(家庭や施設、病院など)に直接足を運び、係わり合いを重ねる中で、盲ろうの子どもたちと係わり手となる大人との間に共有される活動(共同的活動)の中身や教育的係わり合いが成立するための諸条件について考えてきました。

見ること、聞くことに障害を抱える盲ろう児には、周囲の状況を理解することに多大な困難が生じます。通常、見ること、聞くことに困難があれば、手足を使って、あるいは動くことによって、または何かしらの知恵をはたらかせて抜け落ちた周囲の情報を補おうとします。しかしながら、盲ろうの子どもたちの多くは、麻痺等の運動障害によって手足の動きに制約があり、さらに知的な障害をあわせ有ることが多く、いわば「わかりにくさの海」の中を漂っているような状態にあります。こうしたわかりにくさは、子どもたちにストレスをもたらすだけでなく、時に、不安と混乱の中に身を置くこととなり、そのことで子どもたちは本来持っている力を十分に発揮できない状態になります。

子どもへの教育的係わり合いが、その子どもの本来持っている力を基盤として、その生命活動の保全や拡大へと導くことであるならば、まずは、子どもたちが抱えるわかりにくさを教育における大きな制約ととらえ、その制約を最小限にすることから教育的係わり合いが始まるのではないかと考えています。

実際の係わり合いの中では、子どもが楽しめる活動を探して一緒に遊んだり、外に出かけたり、食事をしたりして子どもにとって楽しい時間となるための係わり合いを目指してきました。また、施設で生活する子どもなどは、トイレや入浴の介助などをして施設内での生活が円滑に進行するようにお手伝いをしました。このような子どもの生活に密着した係わり合いを継続する中で、見えないこと、聞こえないこと、自由に運動を起こせないことなどの種々の障害から生じる「わかりにくさ」を最小限にし、子どもの生命活動の保全と拡大のための係わり手側の条件について明らかにすることを目指してきました。こうした極めて重い障害を抱える子どもたちとの係わり合いから得られた様々な知見は、障害児教育の枠を越えて、教育という仕事の中身や意味を考えるにあたって、非常に貴重な示唆を与えてくれます。これまでに出会った障害の重い子どもたちや、今後出会うであろう子どもたちとの係わり合いで得られた知見を「実践の知」として体系化し、教職大学院で学ぶ多くの院生の実践のお手伝いできればと思っています。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。



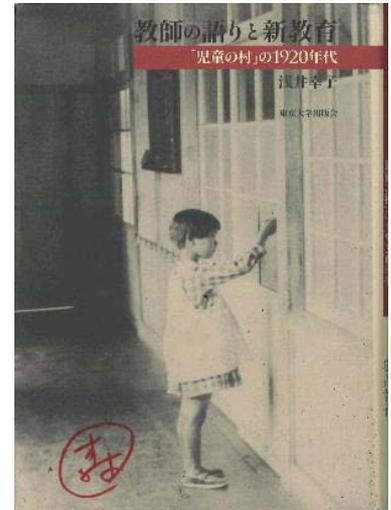
## 書評

## 教育実践とその記録を歴史的文脈の中で取り上げた意欲的な作品

浅井幸子『教師の語りと新教育—『児童の村』の1920年代—』（東京大学出版会、2008年3月）

森 透（教職大学院教授）

本書は著者の学位論文をもとに出版されたものであるが、指導教員の佐藤学は「序文」で次のように述べている。「本書は、一九二〇年代の『児童の村』（池袋児童の村小学校、芦屋児童の村小学校、雲雀ヶ岡学園）を中心とする教師たちが創発した教室の出来事についての一人称の語りと、その変容の歴史的過程を考察することによって、教師である『私』と固有名の子どもによって関係づけられ意味づけられた教育実践記録の成立を、歴史的に探究することを主題とし」そして、「教師たちの日誌や手記や手紙を渉猟し、それらの記述に現れる教師の自己意識の亀裂や葛藤、子どもへのまなざしと関わり、教室の出来事に対する教育的な意味づけなど、教師の経験世界とそのメンタリティを新教育の高揚と衰退の歴史的な脈に則して考察している。」



現在、教師の実践記録は数多く書かれ残されているが、教師の内面も入れ込みながら、子どもの姿を固有名で、その成長のプロセスも含めて描き出すという記録は少ないであろう。本書が対象とした実践記録は、時代的制約の中で、教師たちが「児童の村」という共同体（コミュニティ）の中で、お互いの関係性をつくりながら、自覚的に実践を記録化したものといえる。本書は、それらの記録を歴史的文脈の中でとらえ返し、意味づけている研究書である。

本書の目次を紹介したい。序章「児童の村」の教育の風景—教師の語りを問う視座、第Ⅰ部 教師の一人称の語りと実践記録の成立—池袋児童の村小学校、第Ⅱ部 子どもの発見と教育のユートピア—「児童の村」の教育実験の諸相—、第Ⅲ部 女性教師の葛藤と模索 終章 「児童の村」という出来事—実践記録の成立とその意義

佐藤学は「序文」の中で、本書に登場する野村芳兵衛、小林かねよ、桜井祐男、上田庄三郎などの実践記録の様式は、「日本の教師に特有の教育実践の表現様式であり、物語の様式によって教育経験を記録し考察する教師の実践研究を創出するもの」であり、「この教師文化の伝統は、フェシズム期に衰退するが、戦後の新教育において再び甦り、今日に続く教師の専門家文化の一領域を形成している。」と述べ、本書を以下のように意味づけている。「教育実践記録の解釈を通して教師の経験世界の内側から見た教師史を叙述する独創的な方法論を提示しているだけでなく、教師の心性と感情に埋め込まれた教育の歴史を描き出す独創的な方法も開示している。」

著者の浅井は「はしがき」で、「実践記録は単に過去の教育の事実を映し出す媒体ではない。それは、『私』という教師のあり方、子どもへのまなざし、子どもとの関係、教室の出来事の意味やそこに付随する感情が、最も直接的に構成される媒体である。すなわち教師と子どもの営みを教育実践として成立させる媒体である。」と実践記録を意味づけ、「教師の一人称の語りの変容を記述することによって、実践記録という語りの様式が成立する過程の検討を試みた。教師が『私』という一人称で語ることで、教室の子どもが固有名によって表記されること、教師と子どもの経験した事実が教育として報告されること、これらの出来事がどのように生じたか、どのような意義をもっていたかを解明しようとした。」と本書の意図を述べている。

また著者は「おわりに」で、佐藤の大学院ゼミを紹介し、そこで訪問した学校での教室の出来事を記述する困難な課題と向かい合ったことを述懐している。「一時間のうちのどの場面を、どのような側面から、どのように記述するかということは、教育への関心のあり方、教師や子どもへのまなざし、物事への感受性などによって異なってくる。教室を見る経験に乏しく、教育についての哲学を持たなかった私が苦労したのは当然だった。」（290頁）。このような現代的な課題と

歴史研究が著者の中で融合した作品が本書といえる。

本書で最も共感する点の一つは、教師たちが子どもを固有名で取り上げていることである。実践記録は、戦後、T-C型で書かれることが多く、一人一人の個性をもった子どもたちが登場しないという問題点が指摘されていた。歴史的に、子どもを固有名で取り上げるようになるのは、近代では大正―昭和期の実践であり、その最高結晶ともいえる実践が児童の村小学校であった。

# 報道ファイル



朝日新聞社提供

2008年 12月10日朝刊

## Schedule

- 3/16 mon 運営協議会 (13:30-15:30)
- 3/23 mon 学位記授与式 (10:00~ )  
会場：フェニックスプラザ  
学位記伝達式 (18:00~ )  
会場：福井大学内
- 4/4 sat (予定) 教職大学院入学・オリエンテーション

[編集後記] 4月に走り始めた Newsletter 発行も、10号になりました。編集委員会は、協力教員スタッフも交え、毎号3,4名で紙面構成や写真撮影などを行っています。忙しい合間をぬっての打ち合わせや編集作業ですが、同僚と一つの作品を創り上げる充実感もあります。教職大学院の今の姿を生き生きと伝えられるよう、今後も頑張ってまいります。(K)

## 教職大学院 Newsletter No.10

2009.02.27 発行  
2009.02.27 印刷

編集・発行・印刷  
福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻  
教職大学院 Newsletter 編集委員会

〒910-8507 福井市文京 3-9-1 dpdtfukui@yahoo.co.jp